



樹を見て森を見ず。

個別のニーズに合った支援制度をどう選ぶかといったことに気を取られるあまり、総体として分けられている私たち。

そして、孤立させられ、つながりを求めつつも、他の人々のくらしを含んだ具体的なまちのありようを思い描くことが、ますます難しくなっている私たち。

それは、自立生活をしているという人や一般就労をしていますという人の周辺でも、変わらないんだということを、この間、考えました。この森のますます細くなってゆく小道。無数に分かれてゆく小道。私たちの片足はすでにそこにあります。

でも一步森を出て見ましょう。家族の中で、学校で、職場で、ご近所で、障害の種類や程度にかかわらずなく、すれちがいや成り行きを含めて、おおざっぱに、ごちゃごちゃと、ぶれながら、人々は一緒に生きてきました。形は少し変わっても、いまもそうです。

私たちの軸足は、やはりここにあります。森の中ではなく。やっぱり、学校・職場・地域で共に！

ぶつかりながら、ぶれながら。その軸足を支えるためにのみ、もう片方の足を動かしましょう。日程に迫られて、軸足を離し、道を探しに動くことは、くれぐれもないように。

道がわからなくなったとき、元のところへ戻るのは、森を歩く人の原則です。後戻りしましょう。時には、動かずに食べて眠りましょう。この三ヶ月、迷いながら、考えてきたこと。



五月の総会記念シンポジウム、六月のネットワーク合宿、そして七月の共に学ぶ埼玉交流集会の三つを、今号の特集として並べました。この三ヶ月にわたって、埼玉で追求してきたことは、けっきょく同じ根っこから生じてきたことなんだと、あらためて思います。

それは何かといえば、経済成長の時代が終わった後の、いつ終わりがくるともしれない不況の時代の、社会のありようについてです。みんながたえずきめ細かく分けられ、他をうらやみ、あるいはさげすみ、つながりを求めつつ、競い合わされ、たがいに孤立してゆく時代に、どう向き合うのかということです。いろいろの差はあれ、たぶん世界的に問われていることだと思います。

医療、保健、そして教育と福祉は、前の時代から、少数の特定の人々を、地域の他の人々から分けて、隔離する制度として用いられていることがあります。経済成長の時代には、当然視されていたのですが、時代の転換期で、差別として、当事者を含めた激しい告発にさらされました。

いま、医療、保健、そして教育と福祉、それに雇用支援は、多数の人々を、地域の中できめ細かく分けて、管理する制度になりつつあります。

分けること、分けられることが、いつのまにか当然視されてきたことに伴い、かつて告発された住み慣れた地域から遠く離れた場への隔離も、限りなく増え続けている状況があります。